

多校種間に渡るe ラーニング教材の開発と相互利用に関する質的検討

白石紳一*1, 本郷健*2, 須藤崇夫*3, 堀口真史*4, 斉藤実*5

＜概要＞教育学の世界にも、従来の量的な研究のパラダイムだけでなく、新しい質的研究による研究の必要性が求められるようになってきた。本研究は、2007年に行われた埼玉県が多校種間でeラン教材の開発と相互利用の結果、eラーニング学習前後のアンケート結果に校種間で有意な差があった。質問「コンピュータを使ってこれからは勉強をしてみたいですか」に対する生徒の回答で、中学校では上がり、小学校では下がった。このことについて、質的研究を行い、その方法について検討を加えるものである。

＜キーワード＞eラーニング, 臨床知, 質的研究

1. はじめに

ノーマンら(2000)は、1990年代の始めに起きた質的研究領域での転換は、この10年間にわたってその勢いを増してきたこと示し、社会学、教育学、人類学等での研究方法のパラダイムが変化してきていることを指摘しているが、教育の現場では、質的研究が十分に検討されているとは言えない。教育臨床の現場は、様々な課題を抱えているが、黒崎(2006)は、「学校現場の知」を得るために、教育のエスノグラフィーに注目している。白石(2003)らは、進路自己効力感の変化を生徒に直接インタビューすることで、変化の原因をつかむことができた。現場の教員や生徒の多様な感想や意見から一般的な法則なり、問題点を引き出し、立証すべき研究の手がかりを得ることは、質的研究であれば可能ではないかと推察される。本研究は、2007年に行われた埼玉県が多校種間でeラン教材の開発と相互利用の結果、eラーニング学習前後のアンケート結果に校種間で有意な差があったことから、帰納的に質的研究の手法を実施し、直接インタビューの可能性を検討するものである。

2. 2007年度研究結果

表1は、質問「コンピュータを使ってこれからは勉強をしてみたいですか」に対する生徒の回答の事前事後における小学中学高校別の平均と標準偏差である。表2は、2×3被験者間分散分析の分散分析表に交互作用を加えたものである。

表1 小中高別事前事後平均と標準偏差

時期	校種	人数	平均	標準偏差
事前	小学校	125	3.39	0.83
事前	中学校	126	2.71	0.99
事前	高校	59	2.53	0.95
事後	小学校	123	3.16	0.91
事後	中学校	126	3.24	0.84
事後	高校	64	2.67	0.99

表2 交互作用を加えた分散分析表

要因	平方和	自由度	平均平方	F値
事前事後	3.12	1	3.12	3.73 +
事前事後at小	2.44	1	2.44	2.92 +
事前事後at中	13.14	1	13.14	15.70 **
事前事後at高	0.10	1	0.10	1.19 ns
校種	42.94	2	21.47	25.65 **
校種 at 事前	38.83	2	19.42	23.20 **
校種 at 事後	17.56	2	8.78	10.49 **
事前事後x校種	13.46	2	6.73	8.04 **
誤差	516.35	617	0.84	
全体	575.87	622		+p<.10 *p<.05 **p<.01

*1 SHIRAISHI, shinichi : 埼玉県立大井高等学校 e-mail=jbg02306nifty.com *2 HONGOU, ken : 大妻女子大学 e-mail= t_hongo@otsuma.ac.jp *3 SUTOU, takao: 埼玉県立総合教育センター e-mail=a6036072@pref.saitama.lg.jp *4 HORIGUCHI, masashi : 埼玉県立総合教育センター e-mail=a5521345@pref.saitama.lg.jp *5 SAITOU, minoru : 埼玉県立川越高校 e-mail=minoru@mtc.biglobe.ne.jp

交互作用は、事前事後×校種が有意 ($F(617, 2) = 8.04$ $p < 0.01$) であった。水準別誤差項による単純主効果検定によると小学校における事前事後が有意傾向 ($F(617, 1) = 2.92$ $0.05 < p < 0.1$)。中学校における事前事後が有意 ($F(617, 1) = 15.70$ $p < 0.01$) であった。高校における事前事後は、有意ではなかった。表3は、事前事後における校種に対するLSDによる多重比較の結果である ($MSe = 0.84$, $p < 0.05$)。

表3-1 校種 at 事前

小学校	>	中学校	*
小学校	>	高校	*
中学校	=	高校	n.s.

表3-2 校種 at 事後

小学校	=	中学校	n.s.
小学校	>	高校	*
中学校	>	高校	*

3. 方法

(1) 構造化アンケートの検討

構造化アンケートは、量的研究で、よく行われる手法である。量的データの意味や解釈を補助する目的で持ちられるが、これがどのように差を説明できるのかを検討する。

・アンケート質問項目

学校名 ()

校種 (小・中・高)

回答者名 ()

1. 昨年貴校でeラーニング学習を行った生徒数。

男 女 計

2. eラーニング学習の形態 (○をつけてください) (放課後・授業・特別活動・その他)

3. eラーニングを行った科目名

4. eラーニングの内容 (記述)

5. 生徒のeラーニング学習時間 (記述)

6. 生徒のeラーニング経験

(初めて, 2回目, 3回目, かなり経験している)

7. 生徒のeラーニング学習態度について (先生の目から見た感想) (記述)

8. 先生のeラーニング学習についての、実施前の期待 (記述)

9. eラーニングを行った結果の感想 (記述)

(2) 直接インタビュー(アンケート)

量的分析で出てきた問題点に対応する質問をアンケートの中に取り入れ、その原因について聞いてみるやり方である。

・アンケート質問項目

質問1 昨年のeラン学習後「コンピュータを使ってこれからも勉強をしてみたいですか」について、小学校は、児童の意欲が下がっています。このことについて、実際の授業者として気の付いたこと、特に原因と考えられることを教えてください。

質問2 質問1について、指導内容・学習形態から考えられることを教えてください

※ 実際の質的データ及び研究の成果の過程については、発表時に公表する予定である。

<参考文献>

- Norman K. Denzin, Yvonna S. Lincoln (2000) Handbook of qualitative research 平山満義, 岡野一郎, 古賀正義訳 質的研究ハンドブック 北大路書房
- 黒崎東洋郎 (2006) 実践的指導力の基礎を育成する日常的な教育実習の展望 岡山大学教育学部研究集録 第131号 131-139
- 白石紳一, 三村隆男 特別活動における自己効力と質的研究 第25回日本進路指導学会発表論文集